

研究所だより

(発行) 土佐清水市教育研究所
二〇〇八年十月一日
第二七五号
問い合わせ(八二) 三〇一六

パラリンピック……

この夏は北京オリンピックにわきましたね。そして九月には、北京パラリンピックが開催されました。しかし、オリンピックの時のように華やかにマスコミに取り上げられることは少なく、NHKでダイジェスト放送のみ、民法では皆無に近く朝の情報番組がひとつだけ毎日の結果を伝えていたぐらい。そして衛星放送では大会が終わった後、車椅子バスケットの男女二試合が放送されたのみでした。この違いはいったい何なのでしょいか。

高知県から北京パラリンピックに久川さん(車椅子フエンシング)、種田さん(車椅子バスケットボール)、武樋さん(射撃)の三名の方々が日本代表として参加しました。

私は、車椅子バスケットの関係で久川さん、種田さんとは懇意にさせてもらっていたので、毎日気になりながら、情報が少ないことをすごく残念に思いました。

障がい者スポーツ自体、あまり知られていないのが現状ではないかと思えます。私自身も車椅子バスケットに関わるまで無知な状態でした。以前から車椅子バスケットには興味があったのですが、高知国体の後のよさこいピックに向け、日本公認審判の資格を取得し本格的に取り組むようになりました。その一環として高知県チームの合宿に全日本のチームがきて



練習ゲームをすることになり、その審判をした時のことでした。車椅子バスケットの審判としては、まだまだ駆け出しの自分でしたので、判定もおぼつかない、そんな私に当時の全日本キャプテンが、私の足もとに車椅子をぶつけてきて「どこ見てんだ、バカヤロー」と罵声を浴びせてきました。私は申し訳ないと思いつつも、内心(こっちはわざわざ清水から来て、やっちゃりようがやに、なんぞ!)という思いもありました。でも後でよく考えてみると、自分の「やっちゃりよう」という思いは、なんて高い位置から彼らを見おろしていたんだらうと気がつき、すごく恥ずかしい気持ちになりました。障がいがあってもアスリートにはかわりなく、ふがいない判定への怒りだったんだなと思います。自分自身の差別心に気づいた瞬間でした。

↳次号へ続く

(文責・山崎)

がんばりましょーう

はや十月、運動会・体育祭が終わったのもつかの間、次は文化的な行事やとりくみに追われていることだと思います。

学力について取りざたされている昨今ですが、目標に向かって頑張ろうとする気持ちや、なかまのつながりの大切さを行事のなかでたくさん感じ、学び取ると思います。それが学力をつけるためには大事なことでないでしょうか。

それぞれの学校や地域で子どもたちが輝く、素晴らしいとりくみができよう、ともに頑張りました。